

## 研究ノート

# 40(Quarantine)と観光との関係

佐藤 博康

A Mystery of the Number 40 and Tourism

SATO Hiroyasu

## 要 旨

国際観光の発展にとって出入国管理制度(CIQ)の存在は重要である。とりわけ昨今の新型コロナウイルス流行において検疫制度の果たす役割は世界の注目を集めた。この検疫は英語ではQuarantineと表記され、その意味は数字の40を意味する。なぜ検疫制度にこの40という数字が使われるようになったのか、その背景を歴史的に考察してみると人類の営みの中から生まれた様々な理由が存在していることに気づかされる。現代ではQuarantineを日数に関わらず自宅待機(外出禁止措置)などの代名詞として広く用いられているが、その背景を探りながら検疫制度の意義を再確認する。

## キーワード

国際観光 検疫制度の歴史 疫病と観光 40日間の意味

## 目 次

- I. はじめに
- II. 背景
- III. ヘブライ世界に使われる40と聖書
- IV. 40の意味
- V. ペストがもたらした検疫制度
- VI. 日本のペスト騒動
- VII. 検疫制度の誕生
- VIII. ペスト以外の根拠
- IX. まとめ

文献

## I. はじめに

人類の歴史は目に見えない敵、すなわち様々な病原菌との戦いの歴史でもある。最近では2019年暮れに発生した新型コロナウイルスによる疫病の流行は2020年3月にはWHOにより新たなPandemicに認定され世界中をパニックに落とし入れたことは記憶に新しい。これにより人々の様々な活動は制限され、人間の知恵が試される事態になった。振り返れば人類の歴史の中で多くの疫病が社会制度に与えてきた影響は計り知れない。とりわけ感染元となる人々の移動との関係において様々な制度が生まれている。観光の分野では国境を越える際の検疫制度がこの歴史を物語っている。

本考察は、かつて国際観光において常に課題となってきた検疫制度を歴史的に論じた改訂編にあたる。当初<sup>1)</sup>は検疫制度すなわちQuarantineの語源を探りながら、これが日本に伝えられるまでをまとめたのであるが、本編はこれに新たな根拠や資料を加えることで再度見直しをおこなったものである。したがって、重複部分が存在することをまずお断りしておきたい。

国際観光を語る上では、当然ながら国家や民族間の交流を起こさせる旅行がテーマとなる。実際には国籍や政治的な背景がこれを左右し、手続きとしての出入国や査証、税関、検疫が影響を与えている。これらは一般的にCIQと呼ばれるが、それぞれCustom、ImmigrationそしてQuarantineの頭文字を省略したものであり、本考察は、これらの中からQuarantineを取り上げている。最近の事例としては、新型コロナウイルスの発生による水際対策として空港や海港での検疫が強化されたことや、外航クルーズ船乗客の下船に際して14日間の船内滞留が強制されたことなど、大きな話題になった。

このQuarantineという用語はいうまでもなく40という数字を意味している。この数字がなぜ検疫制度と結びつくのかを考えると、限りなく疑問がわいてくるばかりではなく、言葉の背景となってきた歴史上の様々なできごとや人々のいとなみが想像できる。

## II. 背景

(ピタゴラス<sup>2)</sup>は「数」は万物の本体で、かつ原理だと考えました。…「単一」すなわち単位がすべての「数」の根源だと考えました。「二」という数は不完全で、増加と区分の本源でありました。「三」は全体の数だとされていました。というのは、その数には元始と中位と結末があるからです。「四」は正方形を示すので、最上の完全であります。「十」は初めの四つの数のメ高を含んでいるので、すべての音楽上、及び数学上の比例を含んで世界の方式を示しているとされました。…神と、悪鬼と、英雄は、「最上」の分生であって、今1つ四番目の分生が人間の靈魂であります。この靈魂は不死で、肉体の絆を脱して死の領域に移ったときには、誰か他の人間が、動物の肉体に宿るため世界へ帰るまではそこに留まっています。そうしてついに十分に清められた末に、初めそれが出発したところの根源に経ちかえるのであります。ブルフィンチ「ギリシャ・ローマ神話」野上弥生子訳(岩波文庫)p370, (1991)

そもそも人間は数字が好きな生き物である。数という記号的なものへの興味は、それこそ人類の知的発達を証明する上で重要な要素であったにちがいない。

日本では、日本三景とか日本三大祭、日本三名園、あるいは京都三大祭りなどという〇〇三大話に加えて、四天王から七福神、西国三十三ヶ所、四国八十八ヶ所巡りなどいわゆる数を活用した表現は多い。落語にも、三太夫と八つあんという数字を伴う名前、そして一般的には八百という無限大を示す数字が利用されていることはここであえて取り上げる必要もないだろう。一体、こうした数にはもともと意味が込められているのだろうか。二番目に生まれて二郎だったり、三番目で三郎だとかの例はさておき、わが国の場合、使われている数は、一から十まで特に差はないようだ。遡ってみれば、どうやらこのような具体的な数字の活用は大陸からの輸入品だったように思われる。古事記には150とか対(つまり2)が数字的に意味を持つと思われる数字が出てくるが、これらの数字をのぞいて格別な意味を持つ数字という側面ではほとんど記載はない。

日本書紀では、仁徳天皇期にいたるまでのいわば

神話から前史時代の記録は、人名や出来事に特定の数の利用が集中している。三種の神器をはじめ、千五百(いちほ)、五百(いお)、五十(い、あるいは、いそ)あるいは八十(やそ)、八十万(やそよろず)、八咫(やとと読んで大きいとの意味)などというまでもなく、下照姫の八日八夜の嘆き、八尋鰐など五、八、及び十とその組み合わせが頻繁に使われている。これらの記述に対する解釈はおおむね多数とか大きな表現に使われているというのが通説で、其の根拠となる具体的なイメージや意味を数にもたせるような解釈は見られない。

明治生まれで国際的にも名をはせたわが国の科学史家三上義夫は、「日本の神話には八百万の神とか千五百秋だのというような、数を形容詞に使ったものが多く、またそれが古今を通じて人口に膾炙している」と述べている<sup>3)</sup>が、明らかに特定の数字に特殊な意味を持たせているように思えるのは、この程度のいくつかの数字に限られている。

また、人々の生産活動や行動に大きな影響を与えてきた暦は、星の数や月や太陽の位置(動き)などに関して数字と無関係には存在し得ない。したがって、マヤ文明や日本の秀吉などを例に出すまでもなく、かつては暦(季節ごとの月や星の動き)や度量衡などにかかわる数を支配する者は、常にその時代のリーダーであり支配者でもあった。現代の例では、「0」を発見したインドが目下世界のIT革命をリードしているというのも大変意味深い。古事記などの日本の歴史書にも、人々が生まれ育ち死んでいった歴史を、暦や年齢とともに克明に記録しているのはこの意味からなのだろう。

織田信長は、1560年、尾張桶狭間の襲撃の直前、幸若舞「敦盛」の名句“人間五十年下天のうちにくらぶれば、夢幻のごときなり。一度生を得て、滅せぬもののあるべきか”と舞って、寿命のおよその長さやはかなさを表現しつつ、命を賭けた決戦に臨んだという。はからずも、その22年後本能寺に散った信長の寿命はまさに50年にあと1年と迫った49歳だった。これも当時の日本人にとっては、50年というのがひとつの区切りであったことの因縁だろうか。ちなみに、幼児期の死亡率の高かった近代以前は平均寿命も短く、平均寿命が40年を超えるようになるのは明治維新以降のことである。

いずれにせよ、日本では、神話の時代を除いて、

数字はもっぱら記録用として利用されることが中心で、その使い方や数字そのものに特別な意味を込めたといえるケースは少なかったように見える。このことは、九九演算の暗記力で世界的に名をあげたわが国も、古くは数字の大衆化がさほど進んでいなかったことを暗示している。つまり、日本人は生まれつき数学に強いというのはどうやら疑わしいらしい。現代の数学嫌いの若者を見ていると、真相はこちらに近いといわざるを得ない。もちろん、四や九は嫌われてきたが、これはあくまでも「死」や「苦」の語呂合わせ。三上は、この現象を、「日本人は何事によらず理論を作らずして実際の運用を主とす」と述べて、日本では徳川時代の初めまでは数学は起こらなかったといってよいと断じている<sup>4)</sup>。

一方、西欧ではどうであったか。

数の考え方の始まりは歴史上どこまでもさかのぼっていくのであろうが、数字の概念はメソポタミアあるいはエジプトで使われるようになったといわれ、それが世界に広がって、既述のインドの「0」の発見につながっている。さらに、この「0」が西欧ばかりではなく中国や周辺の文明圏に伝播していったことはあえてここで説明する必要はない。冒頭で触れたピタゴラスの話は西欧文明における数の考え方の一例であるが、数字に対する西欧社会の関心は、日本に比べると異常ともいえるべき関心の払い方である。むしろ、数字を使いたくて仕方がないといった様子が、残された遺跡・遺物や文献などからひしひしと伝ってくる。ここから数字の概念化が東洋世界よりも一歩進んだ格好になっていくように見える。しかも、その数字そのものに格別な意味をもたせるような使い方をする。こうした数への感覚は、りんごの落ちるのを見て、詩情を感じる東洋の感性と、引力という普遍的原理を見つける西洋の感性との違いにも現れているのだろうか。

### Ⅲ. ヘブライ世界に使われる40と聖書

ヘブライ世界の聖書には、いうまでもなく1や3、4、10の他、1週間の基準を作った創世記の7という数字や、十戒、12使徒など現在でも特定の意味のある数字として使われている基本的な数字を数多く見るこ

とができる。これらの数字に特定の意味を持たせて用いるという使われ方が同時に生まれたのは、数の不思議に対する人間の感性の現れではなからうか。したがって、西欧の文献や物語を読むときには、場合によっては数字それぞれに含まれた意味を考えないわけにはいかない。現在13がキリスト教社会で嫌われているのにもそれなりの理由があることだ<sup>5)</sup>。

このような特別の意味を持った数を俗に聖数とか秘数とか呼ぶことがある。ちなみに中国では五星、五行、五臓など5という数字に格別の意味を見出している。8という数もこれに属する。「当るも八卦当らぬも八卦」の八や、今でも中国の世界では8が重要で、車のナンバーに8がつくかどうかで車の値打ちが決まるということもその一例だ。日本でもこの思想が古くに持ち込まれたかあるいは輸入され、先にあげた八百や八十、八を使った大八洲、八岐の大蛇などにそのいわれを示している。また、5についても、五穀豊穰などになごりをとどめている。また、人名にもこれらの数字が使われている例も多い。

さて、旧約・新約聖書の記述に話を戻すと、治世の長さや新たな歴史のページをめくるような出来事が起きるエピソードには必ず40年あるいは40日という40を基準にする数字が使われていることがわかる。40年として表記されている数は、新旧両約聖書の中に40ヶ所以上、40日として表現されているのは10ヶ所以上、40日40夜という例もおよそ10ヶ所、その他の40という表記のある個所は17ヶ所にのぼる。また、特に、旧約聖書中では40という数字が合計で約60ヶ所、新約聖書では16ヶ所となって、実にその8割が旧約聖書の中に現れてくる。

よく知られたところでは、創世記のノアの洪水で、神は、40日40夜の間雨を降らせ、40日間水をとどめておくことで地上を一掃する。モーゼは、シナイ山に40日40夜もってパンも食わず、水も飲まずに十戒を得る。モーゼはさらにヨシュアたちを40日の間カナンの地を探させそこでイスラエルの民は40年間泰平を謳歌した<sup>6)</sup>。また、祭司アロンはエジプトの国をモーゼとともに出て40年目にこの世を去る。イスラエルの民が神の前に悪をなすと、40年の間ペリシテ人の支配下に置いた<sup>7)</sup>。さらに、イスラエルの民は40年間荒野をさまよい、ダビデとヨアシュはそれぞれ40年間イスラエルを治めた<sup>8)</sup>。ヨナがニネベを滅ぼそうとするメッセージの中にも「40日を経

たらニネベは滅びる」との予言がされている<sup>9)</sup>。新約聖書では、キリストも悟りを得るまで飲まず食わず40日間砂漠をさまよっている<sup>10)</sup>。当時断食は40日間続けられたとも記録されている。また、キリストは受難の後40日間地上に留まっていたといわれ<sup>11)</sup>、現在でもカトリックでは四旬節(灰の主日から復活祭までの40日間)としてそのいわれを受け継いでいる。

ともかく聖書の中では、このように40に因んだエピソードが神と人間との間の大きな流れが組み立てられていく。ここに40という数字の共通した特殊な使い方を読み取れはしないだろうか。

## IV. 40の意味

この40年、40日あるいは単に40にちなんだ数字はいったいどこからきたものだろうか。もちろん、起源は聖書ができた時代より以前のことであろう。ノアでもモーゼでも、聖書の作者が記述した時代すでにこの40は大きな意味をもっていたはずだからだ。さもなければ、聖書の基礎となるパラダイムの変換が起こった時代の区切り毎に利用もなく40という数字が使われたはずがない。

聖書の解釈を著した研究家ヘンリー・ハーレイは、「『40年』は、いつもとは限らないが、時にはまさしく1世代を指示する概数であったようである」(ヘンリー・ハーレイ『聖書ハンドブック』聖書図書p116、p166、p393)と記しているが、これはおそらく聖書全体のストーリーの展開からみた類推解釈である。40年の一方になぜ40日があるのかという点の説明になっていない。また、聖書の象徴辞典を著したマンフレート・ルルカーは、40とは、苦難や克己、あるいは罰の時を表す数であり贖罪を意味する数だという。ルルカーも、その利用されたエピソードを並べ挙げることで、数の使われた背景を類推しようとしている。だが、いずれも40そのものの出所や意味についての検討が行われた様子はない。

むしろ40年といい40日といい、年や日数に関係なく40という数字にはなんらかの特別な共通の意味があるはずだと考えることのほうがわかりやすいのではないか。その背景の一部には先に触れたピタゴラスの4、すなわち最上の完全と10、すなわち世界の真理をかけ合わせるところに根拠を求めることができるのかもしれない。四旬節を表す40日にちなんで、



その始まりの日(灰の主日という)キリストの山上の垂訓の中に『父が完全であるように、あなた方も完全なものとなりなさい』という箇所を引用するのも40と完全ということの象徴なのだろうか。

また、直接40という数字ではないものの、合計すると40になるという表現も聖書の中に数カ所見ることができる。たとえば、レビ記には、モーゼを通して神の言葉が語られている中に、『女がもし身ごもって男の子を産めば、7日のあいだ汚れる。すなわち、月の障りの日数ほど汚れるであろう。・・・その女はなお、血の清めに33日を経なければならない』<sup>12)</sup>と書かれてあり、血が清められるためには合計40日が必要とされている。

つまり、この40という数字の背景に、時代やものごとの区切り、そしてその後は再び元に戻る、あるいは、ものごとを新たにやり直すという意味合いがあったことが込められていることはどうやら疑いようがないようだ。カトリックでは原点に戻れ(やり直す)ということから40と回心とを結びつけている。人間の築く体制や時代、自己や理念、いわばパラダイムの転換にかつては40年あるいは40日を必要としたということなのであろうか。したがって、この40という数字がある意味で当時の人々の寿命だったかも知れない。また、体制の変化あるいは時代の区切りを表現していたと考えてもよいのだろうか。ただし、寿命という点では、ヨーロッパにおいて平均寿命が40歳を越えるようになったのはようやく18世紀以降だということも言われており、英語のgeneration(世代：生まれるという語源からきたもの)は現代では一般的に約30年あるいは20年といわれているのはご承知のとおりである。

キリストの登場より前のギリシャ時代、プラトンの『法律』の中には、市民の旅行に関して、いかなる者でも40歳に達しない者は国外に旅行させてはいけないという一節がある<sup>13)</sup>。その理由は、40歳までは一人前ではないから、外国からの悪い影響を受けやすいということによる。なぜそれが40歳なのかは不明だが、寿命の短いと思われるギリシャ時代ですら、40という数字が人々に影響を及ぼしているのは面白い。(ギリシャ・ローマ時代の寿命は実際の2倍で表記されたというという説もある。)ひょっとすると、当時のオリентと東方との交流関係から考えて、論語の“不惑”(40歳にして惑わず)などもこれ

に関係しているといえなくもない。

## V. ペストがもたらした検疫制度

ここで、聖書以降に近代から現代にかけて使われてきた40という数字が持つ意味を探してみたい。冒頭に触れたように、この40という数字はいうまでもなく quarantine(検疫と同義)と関係してくるから旅や観光とは切っても切りはなせない数字でもある。なぜquarantineが検疫につながっていったのか。

中世ヨーロッパ世界を席捲した黒死病いわゆるペストは、その後の人々の文化や生き方に大きな影響を及ぼしたといわれている。だが、ペストはなにも突然中世に発生したものではない。古くから定期的に発生していたことは記録からもわかっている<sup>14)</sup>。しかし、これがいわゆる黒死病として一文明を破滅に追いやるほどの蔓延とインパクトを示すようになるのは、農工具の改良などによる農業生産が向上して社会に一定の安定と余裕が見られるようになり、多くの人口を支えられるようになる中世になってからのことだった。特に、14世紀半ばにヨーロッパを襲ったペストは猖獗を極め、当時の人口の四分の一に相当する3千万人以上の生命を飲み込んだとも伝えられている<sup>15)</sup>。その結果、ヨーロッパの文化や社会、経済に歴史上かつてないほどのダメージとその後の影響を残す。(ボッカチオ「デカメロン」(岩波文庫版)、村上陽一郎「ペスト大流行」岩波新書p130(1983)以下ほかを参照されたい。)

また、その後17世紀に流行したペストについては、『それはたしか1664年の9月初旬のことであったと思う。隣近所の人たちと世間話をしていた際に、疫病(ペスト)がまたオランダではやりだした、という噂を耳にした』という文章から始まるデフォーの「ペスト」(平井正穂訳、中公文庫(2009))<sup>16)</sup>や「ピープス氏の秘められた日記」(白田昭著、岩波新書(1982))などからもその凄惨な有様が伝わってくる。さらに下って、19世紀に発生したペストの状況については、これをモデルにして書いたといわれるアルベール・カミュの「ペスト」を参照されればよい。

中世の西欧では、近代医学が進んでいなかった頃のことだから、このペストを目の当たりにして治療や予防どころか人々はただ恐れおののくばかりで、その対処法についてなんら効果的な手法を生み出す

ことができなかった。これは新たな疫病に対しては現代においても同様である<sup>17)</sup>。当時の人々の生活をしのばせる物語の中にも描かれているように、神に祈ったり、占い師に頼ったり、魔よけの祈祷を授けてもらったり、あるいは、病気の蔓延した町から郊外に逃れる、つまり、いわゆる疎開することが唯一の自己防衛手段だった。

また、こうした疫病は、原因がよくわからないだけに人の心に警戒心や猜疑心を生む。一時は、ユダヤ人がペストを蔓延させる元凶だとして、いわれのない迫害を受けるということも多発したという。疫病をきっかけに人種差別が表面化するの現代も同様である。

また、現在アメリカのナーサリースクールなどで使われている童謡の中に、当時のペスト文化の名残の一端を垣間見ることもできる。子ども達が次のような歌詞で歌いながら紐の端をもって輪になってぐるぐる回る姿は、現地の幼稚園ではよく見られる風景だ。アメリカで子育てをした経験のある方ならだれでも思い出すのではないか。

Ring a ring o'roses  
A pocketful of posies  
Tishal Tishal  
We all fall down

柳田国男の「こども風土記」風に言えば、童謡の中には歴史的な何とかなの事実や記憶が隠されているということであるが、欧米ではこの歌の中にペストの陰が隠れているといわれている。簡単に解説を加えておくと、posiesというのは花束のことで、当時の腺ペストはご承知のように身体のリンパ腺に沿って腫れ物状の腫瘍ができ、これが体中に蔓延してあたかも黒くなって死んでいったといわれ、この腫れ物が非常に悪臭を放った。この悪臭を消すために、当初花の香りが使われたことの名残りだという。やがて、花を使う余裕のないほど死者の数が町にあふれていったのではあるが…。また、Tishal!というのは、身体に鞭を入れる際の音で、効果的な科学治療のままならなかったペストに対して、あるキリスト教の一派は、地面にひれ伏して鞭打ち苦行を行うことで疫病に対抗したといわれ、地面に打ちふして(all fall down)鞭を受けたことのなごり<sup>18)</sup>を意味している。

だが、どのように対策を講じようが、ヨーロッパは定期的に発生するペストの侵入から逃れることは

できなかった。ペストが、ねずみを介したノミからの伝染病であることが正確に理解されるようになるのは19世紀も末になってからのことだ<sup>19)</sup>。因みに、この病原を発見するための先陣争いには、日本の医学者(北里柴三郎など)も明治時代(1894年香港でペストの流行の際)に参加して病原菌の発見で歴史的成果を残している。

中世の人々も、空気が汚染を運びあるいは人が食べ物や商品などを通じて病原を運ぶとも考えたようだが、どうやら中央アジアからのくまねずみに寄生するノミが病原を運ぶ、つまり何か見えないものから伝染するという事に気づくようになるのはさらに時代が下ってのこと。いったんネズミの影響に考えが至ってからは、その証となるねずみの移動には相当神経質になった。特に、ヨーロッパ大陸側では海から貿易船に潜んで上陸してくるねずみたちには神経過敏になり、感染地域からの輸入品は一定期間隔離されたり、あるいは焼却された。そこで、この時期のペスト対策のひとつの有効な方法として、汚染場所からの逃避という自己防衛に加えて、外来の船を一定期間沖合で停泊させて隔離するということになる。汽車などが発明されていない時代には最も有効な方法だったようだ。この手法は新型コロナ時代の今でも日本や香港などでクルーズ船乗客の下船を一定期間認めないという際の論拠として現実に使われた。

## VI. 日本のペスト騒動

日本でのペスト騒動をここで見てみよう。

わが国の歴史上ペストが登場するのは、20世紀に入るか入らないかの頃のこと、外務省の記録(外務省史料館蔵交信記録)によれば、明治30年4月23日黒龍江附近でペストが流行しているという情報が貿易局から政府にもたらされる。これを受けて、予防研究の目的で明治30年5月に委員会が組織される。同年6月にはロシア皇帝の側近の医者ア・ド・スパイエルが大隈重信外務大臣宛文書で、沿海州においてペストが流行していること、ロシアではすでにウラジオストックに検疫所を設置したこと、台湾からの船舶に対して検疫チェックを行うべきこと、また、ペスト流行地域を過去2ヶ月(40日ではなかった)の間に立ち寄っていない証明を求めるべきであること

などが提言されている。

こうした提言や対策にもかかわらず、日本でもペストが流行する。最初の犠牲者は明治32年11月に広島で発生した。これが東西に飛び火して、東は東京、横浜へ、西は1903年(明治36年)に長崎市稲佐郷に到達したと長崎県医師会編纂の医療史に記録されている。その後明治42年には横浜でもペストが流行したとの記録があり、何れの際も病原菌を運ぶねずみを駆除するため猫が大変重宝され、補助金が支給されるなど猫が大事にされたと当時の新聞に出てくるのは面白い。

日本の社会でもいかにこのペストを恐れたか、当時の東京下町の様子を手がかりに紹介してみよう。東京にペスト患者が発生するのは明治35年。本所区押上の東京瓦斯紡績会社寄宿舎の女子従業員だったという記録がある。明治36年にかけて患者14名、死者9名を出した。そこで、ネズミ退治に対して懸賞金を交付することとし、人口の集中と産業規模に応じて一匹一銭から三銭で東京府下の各地域行政機関(郡など)で買取りが行われたと記録されている。特に患者を出した紡績会社やその関係機関や場所に対する消毒と施設内隔離策がとられたが、隔離に対してその期間は明確にされていない。当時ペスト菌がぼろ布に付着していたという噂が流れ、王子や千住周辺のぼろ布業者やメリヤス業者などは大きな影響を受けたといわれている。

## Ⅶ. 検疫制度の誕生

さて、このペストをめぐる、歴史上ネズミとは関係なく被羅者をいわゆる法的に隔離する対策が実施されるのは、1374年1月17日イタリアの現在のエミリア・ロマーニャ州北部にあたるレッジョで行われた10日間だったと記録されているという。(村上前掲書, p137)これがいわゆる検疫所の前身である。これには、1346年から52年にかけて蔓延したペストがわずか4年の間に当時のヨーロッパの人口を大幅に減少させたことが大きく影響した。イタリアの各都市には衛生局が設置され、物や人の移動の管理が徹底された。その基本的措置として行われたのがこの隔離政策である。多数の人命を犠牲にした結果としてはいかにもさびしい対処法であるが、逆にいか

にペストが当時人知を超えた疫病だったかをよく示している<sup>20)</sup>。

ヨーロッパに、この衛生局の下に検疫所が正式に誕生するのは1485年<sup>21)</sup>。所はヴェネチアで、施設名はlazarettoと呼ばれた<sup>22)</sup>。その後医学的にはさしたる進展がないまま18世紀には多くの港町で検疫所が見られるようになる。しかしながら、検疫自体は消毒などの薬物療法ではなく、伝染病感染地区から来航した船を一定期間沖合に泊めておくという程度の方法だった。ここでも例の“40”という数字が出てくる。すなわち、ペスト時代のイタリアでは、旅人は健康証明書(あるいは衛生通行証書)がなければ都市に入ることを拒否された。ヴェネチアでは特にこれが厳しく、この証明書を持たないものは40日間検疫所に放り込まれたとある。(カルロ・M・チボラ「ペストと都市国家」(日野秀逸訳)平凡社自然叢書p42, (1988)以下、宮崎揚弘編「ヨーロッパ世界と旅」(本城靖久)p98, (1997)、イグナチオ・デ・ロヨラ「ある巡礼者の物語」p98, (2000))

さらに、1664～65年にかけて、オランダ経由でロンドンにもたらされたペストについてのデフォアの記述には、ペストで汚染された町を逃げ出した者たちが健康証明書(衛生通行証書)を治安判事にこう書いてもらっている。『この者たちエセックス州のある村に長期滞在し、綿密に観察されたが、病気の兆候のないまま、40日以上にわたって、他人との接触を完全に断っていた。その結果、全員が健康であると結論されており、受け入れても、まったく心配はない。ついにこの地を離れたのは、この町にまで侵入してきた疫病を恐れてのことであり、感染の兆候がこの者たちに表れたためではない』(チボラ前掲書, p154)。ここでも40日という言葉が使われている。

この一定の隔離期間を“40”日にするという発想は、デフォアの場合、ペストの潜伏期間として医者言葉引用している(「ペスト」p199)が、発病まで40日というのはいかにも非合理で、ここでの40日は、明らかに聖書で使われている40という数字の力に期待してのことであろう。40日間外国船を港の沖合に停泊させればすべてが整理されてまた元に戻るというわけだ。この期間が40日になったことに必然性があったのかということこれもどうやら疑わしいというのはカルロ・チボラが調べた当時の衛生局の役人による指示の内容で、実際には40日間ばかりではなく、22日間とか60日間だったりしたと指摘している<sup>23)</sup>。



ともあれこの期間、水と食料だけを陸から運び、その間に発病がなければ上陸させるという考え方は、日数は異なるにせよ現代でも使われている。

## VIII. ペスト以外の根拠

ところが、さらに歴史をさかのぼると、人類の歴史(紀元前13000年以上前に遡る)の中にはペストとは別の疫病が時折顔を出していることに気づく。古代エジプトの時代から、人間にとっての疫病中最大かつもっとも頻繁に発生して恐れられていた疱瘡、つまり天然痘である。ペストほどの致命的猛威こそ振るわなかったが、やはり傷跡を深く残したこの病は、ジェンナーによって種痘が試されるまで人類に大きな影響を与え続けた。スペインの侵略によってインカ帝国が滅亡した原因も武力より天然痘という疫病が原因だったといわれ、中南米と世界の歴史を大きく転換させた。

わが国でも、天然痘の流行は、正史上の記録では天平7年に始まって以降歴史上多くの記述を見ている<sup>24)</sup>。日本書紀には、崇神天皇期の5年に国内に疫病が多く、民の死亡するもの半ば以上に及んだという記述があるが、これもこの疫病の可能性が強い。ともあれ、東大寺のような大寺院建造や都の遷都あるいは政権の交代といった国家形成にも影響するというように、日本の政治や社会にも大きな影響を残している。ペストが、20世紀になって初めてわが国に伝わってきたのとは対照的に、中国から伝わったと考えられるこの天然痘は歴史も古い。その経験の中に、実はこの40という数字がまた頭をもたげているのである。

天然痘は、伝染してもすぐには発病しない。アメリカ疾病管理センター(CDC)によると、現代でも病気に感染しておよそ7~19日間は潜伏期間である。やがて発熱(4日間)し、皮膚の表面にぶつぶつが発生し始め(4日間)瘡蓋に変化(10日間)、やがてそれが剥がれる(6日間)という経緯をたどる。発病してから皮膚にさまざまな痕を残して回復するのがおよそ3週間(21日間)と言われ、潜伏期間(最大19日間)を含めるとおよそ40日間持ちこたえられれば生き残り、他人に感染させることなくまた再びこの世界での生活をはじめることができるのだ。ここで強引な推論をお許しいただくとすれば、医学や科学の進歩

に関わりなく病原菌は人を襲ってくることを考えると、以下のような推論が可能になる。つまり、病の期間の目安は40日。エジプトやメソポタミアの昔の人々も、疫病でも罹ってから40日(19日+21日)もちこたえることができればまた人生を継続することができるという経験を重ねていったのではなかったか。古代の人々が科学的ではないが経験則上からこれらの日数と40という数字を結びつけ、一区切りに格別の意味を与えたとしても不思議ではない。ここに40(quarantine)に対するひとつの答えが見えるのではないか。

さらにもうひとつの重要な根拠となりそうな視点を指摘しておきたい。これは疫病などのネガティブなものではなく、むしろ人類の区切りのための40という視点である。つまり、人間の誕生に関連して、すでに触れたように子どもを産んだ後の女性の血が正常になるために要する日数が40日というレビ記の記述に加えて、妊娠期間との関連性も指摘しておかなければならないだろう。人が受胎して生まれるまで母の胎内で40週間成長するが、これは人類の生命の神秘としておそらくホモサピエンスとして登場してくるころには既に確立していたことなのではなかろうか。こう考えると、生まれ変わりや新しい時代の象徴として、世代を受け継ぐ子孫に可能性をかける言葉として40という数字が受け継がれてきたと言えないだろうか。サイエンスと経験の積み重ねとの両面から推論ができそうである。

## IX. まとめ

ともあれ、こうして40と検疫のための日数とが結びついてラテン語の40を意味する *quadrageni* あるいは *quadragenarius* からイタリア語に移入され、それまでの検疫所 *lazaretto* が英語の *quarantine* という言葉にまとまっていくのは17世紀のことだった(John Arcade, Dictionary of Word Origins, 1990)。それ以降、いまだに人々の移動と40との関係が面々と続いているのは面白い。どうやらこれからも我々はこの40という数字の魔術から逃れることができそうもないのではなかろうか。

ちなみに、日本で検疫制度が導入されたのは、明治32年の海港検疫法による。その要因となったのは、明治27年5月に香港、清国で発生したペスト<sup>25)</sup>と明



治30年中国(黒龍江附近)で発生しロシア沿岸で猛威を振るったペストであった。さて、この法律が昭和27年に廃止され、新たに現在の検疫法にとって代われ現在にいたっている。法律の内容では、隔離とは別個に船舶や航空機の停留措置が行われることになっているが、その時間や日数については、7日、10日、30日、144時間あるいは504時間といった具合で、週や月との関係(つまり、お役所の事務的处理の時間)を匂わせており、いわゆる"40"とはまったく関係のない時間や日数が使用されている。(新型コロナウイルスの場合には自粛の意味で広く quarantine という用語が用いられ、14日間になっているのは指摘するまでもない。)これは、宗教的に基本的な相違があったことはもちろんだが、わが国の地理的、文化的な背景にとって、検疫は、実際にはおよそ疫病や災難とは縁遠い出来事だったということや、数字そのものにさほど魅力を感じなかった日本人の数字観を裏付けているようである。むしろ医科学的な理由によるのだろう。

四方を海に囲まれ、また、深刻な外来の侵略を受けてこなかった日本の地理的背景ではこれも当然の結果だと言えなくもない。その結果疫病対策が海外から見ても遅れているように見られるのも無理もないことなのかもしれない。一方、西欧ではこの quarantine は、かつてしばしば疫病とは関係のない軍事的行動の根拠にも使われてきた。軍事的に海上封鎖を行う場合、船舶を停戦させてチェックをする際の手続き(臨検)にはこの用語が利用されるのが常だった<sup>26)</sup>。検疫行為が時にはペストよりも恐ろしい戦争へと発展する危険性もあるのである。

ところで、私たちは西暦で、40年刻みで50回目の大きなターニングポイントをすでに曲がって新しいミレネアムに突入している。これまでペストや天然痘をはじめ各種インフルエンザ(H5N1およびH1N1などを含む)、はしか、西ナイル熱(1999)、SARS(2003)・MERS(2012)(この2種はいずれもコロナウィルスの一種)、エボラ出血熱(2014)など多くの疫病は、ほぼ10年周期的に人間社会を襲い、地獄のおそろしさと感じることを意味を人々に教育してきたわけだが、歴史を顧みれば<sup>27)</sup>、学習効果を忘れたところに頭をもたげて人間に反省を促している観もある。そもそも、かつては病気、特に、伝染病は、人口が増え

続けた社会で空気がもたらす悪魔の仕業と考えられて、治療というよりは信仰と人倫の矯正が唯一の対応策だと考えられてきた。人々が吸ったり吐いたりする空気がよどんでくれば悪魔たちは薄笑いするのである。死に至る疫病はなにもペストやその他のウィルスばかりではない。世界中には得体の知れない疫病の源が潜んでいる。科学や医学がいくら進んでも、地球上の微生物の世界など、かれらは目に見えないところで必死に生き残るための進化を続けている。医学をはじめ、あらゆる科学は当然ながらその後を追いかけているに過ぎない。生命世界も、また人間社会でも…。果たして、われわれは、心と体の準備ができていのだろうか。常に用心していなければならないのだ。とりわけ、地球温暖化による影響が拡大している現在、年間10億人以上の旅行者やビジネスマンが国境を超えて移動するグローバル化時代には人知の及ばない危険性がそこここに潜んでいると言わなければならない。

このところの新型コロナウイルスなどの感染は、水際の検疫(quarantine)という用語とその重要性を再確認させてくれた。人類と感染症細菌類との戦いは今後も限りなく続いていくことだろう。それにしてもいつものことながら日本政府の対応が欧米に比べて非常に遅れているように感じられる。これは、欧米では歴史的に感染症の脅威や恐怖が政治や経済にしっかりと根をおろしている<sup>28)</sup>のに比べ、日本では既述のように人口が半減するほどの大きな影響を受けてこなかったことが影響しているのではなかろうか。だが、今後日本がどのような影響を受けるかはまさに神のみぞ知るである。

外務省海外情報ばかりではなく、羽田、成田空港をはじめ国際空港の出発ロビーには、海外旅行者向けに、オレンジやブルー、黄色や白の用紙に、現在世界各地で発生している様々な疫病や危険な生物などに対する注意書きが配布されている。われわれが生きている地球や人間以外の存在について考える良い機会と思われるので、飛行中の暇な時間を利用して旅行者の皆さんもぜひ目を通してみることをお勧めする。とりわけ一見安全安心ボケの無防備な日本人海外旅行者には新型コロナ禍を機会に十分に理解してほしいところである。

## 文献

- 1) 静岡精華短期大学紀要第10号(2002), pp.41-58
- 2) 紀元前540年サモス島に生まれている。
- 3) 三上義夫「文学史上より見たる日本の数学」岩波文庫(1999), p31
- 4) 三上義夫 Ibid. p33以下。
- 5) キリストの13の使徒のうちユダが裏切ったことから縁起が悪いとみられるようになったことはいままでもないこと。
- 6) 土師記3.11
- 7) 土師記13.1
- 8) サムエル 記下5.4、歴代志下24.1、使徒行伝13.18
- 9) ヨナ書3.4
- 10) マタイ福音書4.2、マルコ福音書1.13、ルカ福音書4.2
- 11) 使徒行伝1.3
- 12) レビ記12.1,2,3,4
- 13) プラトン「法律」第12巻五以下参照(森・池田・加来訳 岩波文庫下巻)p513以下, (1993)。
- 14) 旧約のサムエル書の時代(紀元前11世紀ころ)に最初のペストの記憶らしきもの(腫物という言葉)が登場する。また、西暦では165年から180年、542年から543年の流行が知られている。前者の流行の際にはローマで数百万人が犠牲になったといわれている。J. Diamond, Guns and Germs and Steel, Norton, p205, (1999)。
- 15) 1346年～1352年の間に、ヨーロッパでは人口の4分の1から半数近くがペストの犠牲になったといわれ、一部の都市では人口の70%が亡くなったとの記述がある。Ibid. p202。
- 16) 同じ著作の翻訳もので、栗本慎一郎訳「ロンドン・ペストの恐怖」小学館(1994)がある。
- 17) アマエビなどのまじないや宗教に頼る姿は現在のコロナの時代でも変わらない。
- 18) イエズス会創始者のイグナチオ・デ・ロヨラの「霊操」には切に願っている恩恵を探し求めるため自らの罪を深く懺悔する手段としての外的苦行として鞭打ったり傷つけたり身体を懲らしめる方法があると記述している。門脇佳吉訳(岩波文庫)(2019)。
- 19) ヴェネチアのカーニバルでは仮装行列の中に必ずねずみの仮装が現れる。ペストの影あるいは警告として。
- 20) M. Rowling, Everyday Life of Medieval Travellers, Dorset, pp.112-121, (1990)
- 21) 一説では1423年。
- 22) 新約聖書ルカ書の中で描かれているキリストの奇跡のストーリーの中に、腫れ物やおできのできた貧しい人々が治癒される話が多く出てくる。とりわけラザロという全身ができもので覆われた人物の話が象徴的で、ここからこの言葉が派生している。ルカ書ではこの話に先立って、イエスが荒野を40日さまよったことが語られている。つまり、聖書の中に、検疫制度と40との関係もラザロを介して婉曲

に示されている。ちなみにカトリック教会によれば、ラザロとはヘブライ語で「エレアザル」つまり「神は助けたもう」という象徴的な意味である。

- 23) Ibid. p104. また、英国のオンライン版百科事典ブリタニカには、最初は30日間であったものが後に40日になったと記されている。これが真実だとすると、検疫と40日との関係は当時それほど意識されたものではなく、これを結びつけるようになるのは、後世になってからのことだということになる。
- 24) 富士川游「日本疾病史」東洋文庫。
- 25) この際に日本から派遣された北里柴三郎がペスト菌を発見する。
- 26) よく知られたものでは1963年のキューバ封鎖の際にケネディ政権がとった手法に顕著な例を見ることができる。
- 27) 石弘之「感染症の世界史」(角川ソフィア文庫)p50以下, (2014)に詳しい。
- 28) ヨーロッパを旅するとペスト禍終息を記念するモニュメントを街の中心によく目にすることができる。忘れてはならない記憶として。

## 参考文献(本文中引用のほか)

- 「聖書」フランシスコ会聖書研究所(2015)及び日本聖書協会(1988)
- 川喜田愛郎「近代医学の史的基盤」上、岩波書店(1979)
- 堀米庸三「西洋中世世界の崩壊」岩波全書(1974)
- ノーマン・カンター(久保儀明他訳)「黒死病(疫病の社会史)」青土社(2002)
- E.S. Bates, Touring in 1600, Houghton Mifflin (1912)
- Daniel Defoe, A Journal of the Plague Year, The Heritage Press(1968)
- Karlen, Arno, Man and Microbes, Touchstone (1995)
- William H. McNeil, Plagues And People, Anchor(1976)
- Oleg P. Schepin & Waldemar Yermakov, International Quarantines, International Universities Press(1991)
- Barbara W. Tuchman, A Distant Mirror, Ballantine(1978)
- 外務省外交史料館所蔵交信文書類  
読売新聞(明治時代)
- 東京都北区役所編「北区史―通史編―近世」(1996)
- 日本語訳ジャレド・ダイヤモンド「銃・病原菌・鉄」(上)草思社(1997)
- 石弘之「感染症の世界史」角川ソフィア文庫(2014)